

# まんだら通信

第228号 (通巻263号)

平成27年06月 西暦2015年 佛暦2581年 皇紀2675年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高栴 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org



## 高野山開創千二百年

弘法大師が、嵯峨天皇のお許しによって、高野山をお開きになつて、今年でちょうど千二百年の節目の年になります。

私たちの真言宗智山派でも、寺田能化様はじめ大勢のお坊さまが先き頃、和歌山の高野山金剛峰寺で厳かに法要を営み、お祝いをして来ました。

お大師さまは、千二百四十年前の宝亀五年(七七四年)六月一日に讃岐の国、今の香川県の豪族佐伯直田公のお子としてお生まれになりました。四国八十八ヶ所霊場の七十五番札所、善通寺がその場所です。ね。幼い頃のお名を『真魚』とお呼びし、神童の名をほしいままにしましたが、その頃も今以上

上に、行政官としての国家公務員になることは、殊に一地方の豪族にとつてはこの上ない名譽だつたと思います。そのような一族の強い希望があつて、お大師さまは都の大学に進むことになりました。

しかし、そこでの勉強の内容は、人々の悩みや苦しみを解き放とうという、お大師さまの思ひからは、ほど遠いものでした。散々悩んだ末に、大学をやめることになりました。

この時のお気持ちを表したものが、世界最初の戯曲といわれる『聾瞽指帰』で、儒教・道教・仏教の考えを三人の登場人物に語らせ、人の悩みを解くには仏教以外にはないとお説きになっています。

司馬遼太郎さんもお書きになっていますが、大きな期待をもつて送り出してくれた一族の人たちを説得したい、というお考えもあつたのではないのでしょうか。

こうして山岳修行の修験者たちに混じつて、吉野・熊野の人跡稀な原始林や四国の山々、海辺の洞窟に籠もり、ご修業を続けること数年、最先端の仏教は、中国に渡り真言密教を身に付ける以外にはないと目的を決めて、留学生として遣唐使船の一員となります。

唐の長安、今の西安に着いたお大師さまは、お弟子三千人と言われる、青龍寺の恵果阿闍梨のお弟子になります。この時、恵果阿闍梨は「あなたが来てくれることを、一日千秋の思いで待つていました。私の余命は長くはないので、急いで灌頂を致しましょう。早くお国に帰つて、この類い稀な最高の教えを広めるように。」と、真言密教の教えのすべてを伝えて、入寂されたのでした。

インド伝来の法具や画像・大切な経典類の総てを託されたお大師さまは、本来は二十年の留学期間のところ、僅か二年で、帰国する遣唐使船に便乗して、無事にご帰国になります。

お大師さまのお気持ちは、一番元になるお釈迦さまの教え、他人の悲しみを自分のこととして悲しみ、他人の喜びを自分のこととして喜ぶ慈悲の心を、人種も生い立ちも氣候風土も全く違う日本人に、しっかりと伝えることだつた、と思います。

それは、縄文の昔から日本人が大事にしている、ご先祖への思いであり、魚や獣や虫は言うに及ばず、山にも川にもかまどにも、トイレにさえ神が宿るといふ『八百万の神々』を、敬い祀ることもその一つでしょう。

以前からの宗教と新しい宗教が、折り合いをつけ、同じように信仰されるのは、私たち日本人には自然のことですが、世界はそうではありませんね。

中世、ただ一つの神以外の信仰を認めないキリスト教は、世界中に宣教師を派遣して民族宗教を絶滅させました。

織田信長の頃、キリシタン・バテレンが日本にも来ました。人格が優れた人が多く、大名などが信者になつて一時は大変な勢いでしたが、その本物の姿が日本に合わないことが分かつて、禁止されました。隠れキリシタンの弾圧など、悪いやり方だつたという人もいますが、世界を見れば分かるように、そのお陰で日本は植民地という奴隷国家になることがありませんでした。

今、同じ聖書を信仰する宗教、イスラム教の宗派同志、キリスト教とイスラム教が、血で血を洗う争いを続けています。そのことを思うと、神様も仏様も一緒に信仰できる日本人の真似をすれば、世界はよほど平和になると思うのですが。

お大師さまが、多くの人の幸せを願っていた実例は他にもあります。

香川県の讃岐平野三千二百ヘクタールを現在も潤おし続ける満濃池は、お大師さまが別当(責任者)として修復しました。また、世界で初めて、身分に係わらず、誰でも入学できる完全給費制の学校『綜藝種智院』をお開きになりました。

## おじいちゃん戦争のことを教えて

人も羨むおしどり夫婦でも、長い間には一回や二回の夫婦げんかはあるでしょう。あとで冷静になつて考えると、勝つた方にも負けた方にも何らかの落ち度はあります。

今年も太平洋戦争が終わつて七十年の節目といふこともあつて、出版物や放送などの企画が目につきます。

あの戦争で責任はどちらにあつたかと言え、アメリカの方が圧倒的に大きかつたと私は思つていますが、相変わらず日本が悪かつたと思つて居る人が、特に朝日新聞はじめ、自分は知識人と思つて居る人に、残念ながら多いようです。

当時のアメリカ共和党の有力議員の『ルーズベルトの開戦責任』(ハミルトン・フィッシュ)や『アメリカの鏡・日本』(ヘレン・ミアーズ)など、アメリカの責任が大きかつた、という意見は今までも沢山あります。

けれどもこれらは、大作に過ぎて読み通すには荷が勝ち過ぎます。

約二十年前に出版された『おじいちゃん戦争のこと教えて』は、副題に『孫娘からの質問状』とあるように、当時アメリカの高校に通つていたお孫さんが、クラス担任の教師ミス・ウッドの勧めで、祖父の中條高徳さんと手紙やメールのやり取りをしながら、あの戦争の本物の姿はどのようなものだったのか、国際色豊かなクラスで、おじいちゃんの返事を読み進むうちに、太平洋戦争のことだけでなく、日本の歴史や皇室に、誇りを持って意見発表する様子が伝わってきます。

私は上の孫たち三人に買ってやりました。小学館文庫で税抜き五七十一円です。

中條さんは、昭和二年長野県更埴市生まれで陸軍士官学校、学習院大学を卒業。アサヒビルに入社。後にアサヒビルを建て直し、アサヒビル特別顧問。昨年十二月二十四日八十七歳で亡くなりました。

最近、キンキンこと愛川欽也さんが惜しまれて亡くなられました。

僕の友人も、その翌日に、ひとり旅立ちました。まだ六十八歳でした。仕事はリタイアしていたのですが、奥さんが働いていたので、ひとり留守番をしていたのに、何を思ったのか、お風呂に入ったようで、そこで心臓発作が起こり、倒れたそうです。

でも、必死の思いで、自力で一十九番をかけ、救急車を呼んで意識が薄れてしまったのです。救急車は駆けつけたのですが、マンションのドアは鍵がかかったまま。やむを得ず、隣の部屋からペランダ伝いに、ガラス戸を打ち破って入ったようですが、すでに当人は亡くなっていたそうです。

息子さんから電話があつて、葬式に行きました。奥さんと息子夫婦、それに親戚が二、三人、友人は私ひとりという葬儀でした。

確かに友だちが昔からいない男でしたが、ご最期まで寂しい思いをさせてしまったと思えました。私に電話をくれたのも、「お父さんに何かあったら、この人と、この人に連絡をしない」と言われたからだと仰います。もうひとりの人は、弔電だけでした。

でも、ひとごとではありませんよね。多くの人に囲まれて、「ありがたい、みんなありがとう」と言つて大往生などというのは、まさに夢のまた夢でしょう。

今日は、そうした人間の最期にまつわる、いい話を紹介しましょう。知人の看師さんが教えてくれました。

Uさんは、七十九歳。公務員を無事定年まで勤め上げ、老後もご夫婦で海外旅行などを楽しんでいらつしやいましたが、五年前に奥さんを亡くしてから、ガクツと体調が悪くなり、寝たり、起きたり、生活がはじまりました。

女やもめに花が咲き、男やもめにウジがわくと

言いますが、男性は奥さんを先に亡くすと、ダメですねえ。Uさんも同様でした。仲のよかつた奥さんを失つてから、氣力を失つたようで、それまでひとりできた食事もとれなくなつてしまつたそうです。

東京に住んでいる息子さんが心配して、施設を探してくれたのはよかつたのですが、入居してまもなく息子の顔もわからないほどの認知症になつてしまい、ほとんど一日、何もしやべらず、無表情の毎日を送つていました。

やがて、施設から病院に移つたのですが、その時でも、まさに奥さんの死が、生きがいの喪失を招いてしまつた典型だと、お医者さんたちも家族に説明をし、一人息子さんも「無理な延命治療はしないように」医師に伝えてありました。

息子さん夫婦も、お孫さんたちも、死を待つだけの日々を送つていました。

それから半年、時は残酷です。やがて、待つていたかのように、Uさんに死の影が訪れます。尿の量も減り、点滴も受けつけない。そのうえ、前夜から、次第に呼吸が細くなつてきたのです。朝から、Uさんに酸素が入りました。

すると、少し呼吸が楽になつたようです。それでも、あと数時間の命です。

息子さん夫婦がベッドのそばで、無言のまま、お父さんを見守つています。もう、何もすることはないからです。

その時、知らせを受けたのでしよう。九州から品のいい老婦人が、部屋に入つてきました。

「しばらくでした。会いたかつたわ」

老婦人は、そう言つてベッドの脇に座り込み、Uさんの顔を覗き込み、頬を両手でさすりましました。

看師さんは、驚きました。

その美しい老婦人は、Uさんのベッドの枕元に飾つてある、亡くなつた奥さんそっくりのお顔で、まるで写真から抜け出たようだったからです。

すると、どうでしょう。突然、長い間、あれだけ無表情だったUさんの顔に血の気が差し、肌

生き生きと輝き、目もぼつちりと開き、いまも何か言いたそうになつたのです。生気がみなぎつてきたとは、まさに、このことです。

これには、息子さんも泣き笑いしながら、お父さんに向かつて「これは負けた。やつぱりおやじにとつて一番大事だったのは、おふくろだつたんだな。表情が全然ちがうじゃないか。おばさん、ありがとう。おやじはいま、あれだけ会いたかつたおふくろと会つていゝつもりなんだよね」と言いました。

「お父さん、よかつたな。お母さんに会えて。会いたかつたんだよな、もう一度、大好きだつたお母さんに。天国じゃなくて、ここで会えてよかつたじゃないか」

そして、息子さんは、わざわざやつてきてくれたおばさんに深く頭を下げました。

おばさんもハンカチで目を覆いながら、ただうなづくだけでした。

(ああそんなにお父さんを愛していたんだ……) 看師さんも、Uさんが急に愛おしくなり、涙の前が見えなくなつたと言います。

それから二時間後、息子さんご夫婦やお孫さん、ひ孫さんたちのにぎやかな声の中、Uさんは旅立たれました。

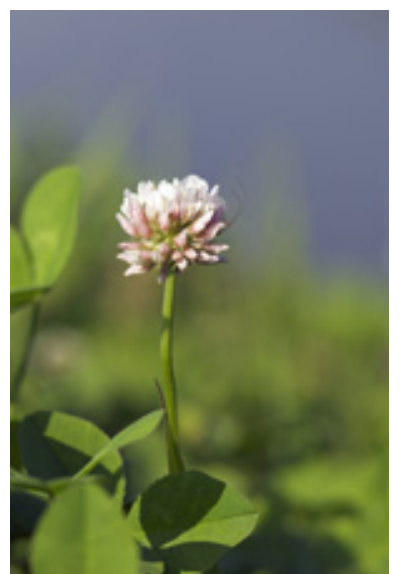
お別れのために、ご家族が病室を出て行かれる際、看師さんは、また驚いたそうです。

息子さんが「おばさん」と呼んでいたあのUさんの奥さんそっくりのお姉さんが、入つてきた時とはちがう普通のおばさんに見えたからです。

看師さんは、その女性から「ありがとうございませう」といひねいに挨拶され、黙礼を返した時、こう思つたそうです。

(もしかしたら、あの瞬間、亡くなつた奥さんがお姉さんになつて、本当に病室に入つてきたのかもしれない……)

いいんです、どうでも。間違ひなく、Uさんは最期のあの瞬間、愛してやまなかつた天国の妻と再会したのですから。



餌運びしています。▼今月の野草はシロツメクサ【マメ科シャジクソウ属】名前の由来は幕末、オランダから献上されたガラス製品が壊れるのを防ぐための「詰め草」で、ごく稀に『四つ葉のクローバー』があり、幸運の印として珍重されていますね。尚、先月オニノヤガラと紹介した野草は、ハマウツボ科のヤセウツボの間違ひでした。形がそっくりなので、間違ひたのですが、手許の写真集『散歩道の植物』(福田洋)に、「ヤセウツボは光合成が出来ない植物で、シロツメクサなどマメ科の植物の根に寄生して育つ寄生植物」とありました。2015.06.09 龍渉

難いという声を沢山聞きました。許されることなら、もうしばらくお続け戴きたいと思う人は、多いのではないのでしょうか。▼1ページの写真は、修理が終わつた山門です。30年ほど前、前の柱が腐食して修理しましたが、同じ部分の腐食が進みまされたので、役員さんと相談の結果、柱の切り継ぎをしました。工事は大神宮の竜崎工務店。見積もり価格は73万円余りでしたが、66万円で済みました。これで、向こう何十年かは安心していいと思えます。▼今年のツバメは2組のつがいが巣を作りました。一組は昨日、最初の1羽が孵り親鳥が、今日の雨降りの中を

▼「卯の花の匂う垣根にほととぎす早も来鳴きて」と歌にあるように、しばらく前からホトトギスがしきりに鳴いています。40年ほど前までは鳴き声を聞かなかつたのですが、昔から「テッペンカケタカ」と聞きなしていますが、どう聞いてもただ甲高くキョキョキョキョとしか聞こえません。何故か昔から人の心を惹いたようで、和歌や俳句などにしきりに登場しますね。昨日、梅雨入りしました。▼ご高齢の寺田信秀能化さまは、4年のご任期を全うされ、今月中に智積院からご自坊の館山市總持院さまにお帰りになります。智積院会館に泊まって、朝の修行に参列する、全国からの檀信徒へのご法話など、心にしみて有り

## 余滴